

殺処分のない未来

岐阜市立三輪中学校 3年
後藤菜々穂(ごとう ななほ)

1日に60。皆さんこれが何の数字だと思いますか。これは2021年度の犬・猫の殺処分数です。

1日に約60匹、1年に約2.3万匹もの犬や猫が殺処分によって命を落としています。

私が殺処分について興味を持ったきっかけは、学校のポスターでした。「犬を飼う第一希望を保護犬に!」がそのポスターのテーマになっていました。私は犬はペットショップで買うのが普通だと思っていました。保護犬を飼うという選択肢があることに驚かされ、くわしく知りたいと思うようになりました。

私の家には犬が2匹います。生まれた時からずっとたくさんの愛情を受けて育ってきました。しかし、愛情を受けずに人の手によって最期を迎えなければならない犬がいるという事実が私には信じられませんでした。

私の母は4年前の冬に、車の下で震えている小犬を見つけました。母はその後、小犬を家に持って帰りましたが、すでに家で犬を飼っていたため引き取ることができませんでした。そこで知人に声をかけたところ、飼ってもいいという話になり、無事その小犬は引き取られることになりました。しかし、もしあの時引き取り手が見つからなかったら、あの小犬は殺処分されていたことでしょう。

母が見つけた小犬は、運良く優しい引き取り手が見つかりましたが、そうでない犬がいるのが今の現状です。同じ命でも平等に扱われないということは、決してあってはならないことだと思いました。

どうすれば一匹でも多くの命を救えるのか考えた結果、私はここに三つの提案をします。

一つ目は、もし自分が飼えなくなった時のために、次の飼い主を決めておくということです。例えばペットショップで動物を買う時、もし自分が飼えなくなった時のために、次の飼い主を決めるというのをルール化するということです。これはペットショップだけではなく、自分の身近な人から譲り受けた時にも同じように、第2の飼い主を決めるというルールを徹底することが大切だと思います。そのことによって、飼えなくなったからといって捨てられたり、保健所に連れて行かれたりする数が少なくなるのではないかと思います。

二つ目に、保護犬や猫へのサポート制度です。保護犬や猫への経済的なサポートをすることで、ペットショップで飼うという以外の選択肢にも目を向けてもらえるはずです。例えば、ワクチンを無料で受けることができたり、エサ代の割引や医療費の補助などペットを飼う上で必要になる費用の一部を負担します。

三つ目は、一時保護施設の数を増やすということです。たくさんの人に自由に施設を見てもらい、実際に、犬や猫に触れ合ってもらいます。その事によって、まず犬や猫の引き取り手が増えるのではないかと思います。そして今の殺処分の現状を知る一つのきっかけになるのではないかと思います。

現在、ボランティア活動で殺処分ゼロを目指して活動している方がたくさんいます。しかしその一方で殺処分が減らないということは「ペットを飼う」ということを軽く考えている人が多いからではないでしょうか。ペットを飼う時、最後まで責任を持つということが大切なのです。飼い主はペットの命を担っているという事実を決して軽く受け止めてはいけません。

私は将来、日本だけでなく世界中で「殺処分」という言葉自体がなくなる、そんな未来を信じています。